

## 94. 大津北郊地域発見の 須恵器について

### I

大津北郊地域は、滋賀県内でも有数の遺跡密集地として知られている。この地域には、近江大津宮錦織遺跡をはじめ、縄文時代晩期の標識遺跡の滋賀里遺跡、弥生式時代の北大津遺跡、方形周溝墓の調査契機となった南滋賀遺跡、古墳時代前期の皇子山古墳、山麓や丘陵地に営まれた後期群集墳、白鳳期の寺院跡である南滋賀町廃寺・崇福寺跡・穴太廃寺、中近世期の坂本城跡・宇佐山城跡・壺笠山城跡などの城郭遺構が、狭隘な平野や山麓に分布しているのである。ちなみに国の史跡に5件が指定されている。

しかし、一般企業や公共事業による種々の開発は、地下に眠る遺跡に対して多大の影響をあたえている。すなわち、開発の急速な進行に伴い必然的に遺跡の事前の緊急調査が増加し、調査後は、常に遺跡の保存問題がもちあがっているのが現状である。また、今までに偶然発見された遺物は、希少ではあるが、地元の方がたの住居の床下や各公共機関の倉庫に生きた資料として活用されずに眠っている場合がある。

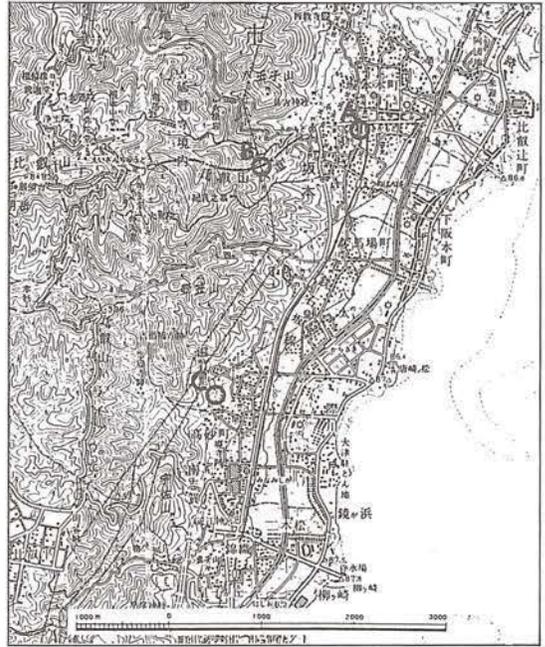
そこで今回ここに紹介する遺物は、昭和57年3月8日大津市が実施した下水道工事中に発見されたもの、滋賀里在住の桐畑嘉市氏が熊ヶ谷古墳群中の山林内の植採の際発見し保管されていたものと大津市役所坂本支所に長く保管されていたものである。

以下、遺物の特徴と若干の考察を述べてみたい。

### II

#### A. 大津市坂本本町1653-1 (下水道工事中発見)

蓋杯3点、高杯1点、懸2点の計6点が出土している。それらは工事中の偶然の出土にもかかわらず、いずれも比較的遺存状態が良好であり、しかも付近の古墳の分布・存在等から一応古墳出土遺物(副葬品)とみなして個々の土器について特徴を述べてみたい。杯身(1) 内傾したまま上方へのびる立ちあがり、端部より下方へ約 $\frac{1}{2}$ の部分で薄くなっており、その変化する部分の外表面は段を有している。口縁端部は面をもたず丸くおさめている。受け部は直線的にはほぼ水平方向へつまみ出すように短い。その上面に中央と基部に



出土地点位置図

凹線がめぐっているが、基部のそれは立ちあがりのオリコミ技法を示しているものと思われる。立ちあがりを受け部の比高差は1.4~1.8cmを測る。底部 $\frac{1}{3}$ にヘラケズリが認められるがその技法は粗雑である。口径13.8cm、器高5.0cmを測り、1mm大の砂粒を多く含む胎土であり、焼成堅緻で色調は明灰色を呈する。蓋杯(2) 丸味のある天井部と直線的に下方へのびる口縁部の境には、その上下を強くナデることによって浮きあげさせている稜線が認められる。しかし、それはその技法から明確なように形骸化が著しく、実質の意味はあまり持っていない。口縁端部内側には面を有しているが、これも形骸のみである。天井部 $\frac{2}{3}$ に丁寧なヘラケズリが認められるが、1回転に対する施行面が大きく3回転しているにすぎない。口径14.6cm、器高4.5cmを測り、1mm大の砂粒を多く含む胎土で、淡灰色やや軟質に焼きあげている。蓋杯(3) 現状では天井部は大きく陥没しているが、その部分にも丁寧なヘラケズリが施されており、本来丸味のある天井部であったものが、焼成直前に陥没したものであると思われる天井部と口縁部を画する稜線は明瞭に

認められる。口縁部は天井部とほぼ同様の丸味をもちつつ内湾しながらはじまり、その後直線的に下方へのびている。口縁端部内面には段を有している。天井部約 $\frac{1}{2}$ にヘラケズリが丁寧に施されており、また天井部内面には段を有している。口径14.4cm、器高4.2cmを測り、精選された細かい胎土であり、焼成堅緻で色調は青灰色を呈する。

高杯(4) いわゆる長脚二段無蓋高杯である。杯部口縁は底部より直線的に外方へ広がりながら上方へのびており、途中中央付近から内側に厚肥させている。口縁端部は丸くおさめている。口縁部中央に一条、底部との境に、灰の付着のため明瞭ではないが二条もしくは三条の凹線をめぐらしている。脚部は上段のみしか遺存していない。杯部より直線的に下方へのび、上部下端付近から外反気味に広がっている。その変化する付近に2ヶ所に二条ずつ凹線をめぐらしており、杯部より上部凹線までカキメ、2ヶ所の凹線帯の間に波状文を施し、下部凹線以下は無文である。スカシは相対する四方に切れ目を入れて表現しているが、焼成段階に接合している。口径9.6cmを測り、胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅緻であり、色調は黒灰色を呈する。外面はほぼ全面に灰がかぶっているが、焼成温度が低いから自然釉にはいたっていない。

甌(5) ほぼ球形の体部から「く」字状に屈折し外上方へのび、その後外反気味にさらに広がる口頸部を有する。口縁部内面は「受け口状」になっており、端部は上方に面を有する。口縁部には波状文、頸部は、細かい波状文を施しており、体部と頸部の境には凹線が認められ頸部と口縁部の境には稜線がめぐっている。体部は穿孔直上に二条、直下に一条の凹線をめぐらしており、その間にはヨコカキメの後キサミメを施している。体底部はカキメの後、不定方向のナデを加えている。口径12.8cm、器高16.5cmを測り、器壁は厚い。底部に「X」のヘラ記号を有し、胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成堅緻で色調は黒灰色を呈している。全体に自然釉が付着している。

甌(6) 口縁部は不明であるが、細部を除くとやや小形ながら(5)とほぼ同様の形態をしている。細部の差違をあげてみると、体部と頸部を画する凹線が無い事、穿孔直上の凹線が一条であること、体部凹線間のキサミが小さく、ヨコカキメが明瞭なこととの3点となるだろう。しかし、胎土焼成は(5)と同一とみなすことが適当であり、すなわち同一時期のものと考えられる。

以上の土器を分類してみると、

A類—3・4

B類—1・2・5・6

となる。すなわち、A類は陶邑編年II型式3段階から4段階に、B類はII型式4段階から5段階に比定され



上 坂本本町出土地点

下 熊ヶ谷1号墳(桐畑古墳)

る。

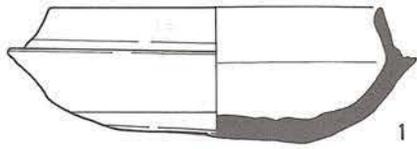
## B. 桐畑嘉市氏保管

杯身(7) 立ちあがりは、はじめ内湾し、その後直線的に上方へのびている。端部は上方へつまみ上げ気味に丸くおさめている。受け部は、外上方へ短かくつまみ上げ気味にしている。立ちあがりと受け部との比高差は1.3~1.6cmを測る。底部の約 $\frac{1}{2}$ に丁寧なヘラケズリを施している。全体に器壁も薄くシャープな感じをうける。口径11.9cm、器高5.0cmを測り、胎土は砂粒を若干含み、焼成は堅緻であり、色調は青灰色を呈する。蓋杯(8) 丸味のある天井部と直線的に下方へのびる口縁部を画する稜線は明瞭である。口縁端部内面には段を有する。天井部の約 $\frac{1}{2}$ にヘラケズリが施されている。口径15.9cm、器高4.9cmを測り、胎土は砂粒を若干含み、焼成は堅緻であり、色調は淡灰色を呈する。

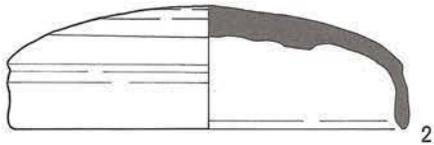
以上の2点は陶邑編年II型式3段階に比定される。

## C. 東坂本ケーブルコンクリート橋付近出土一大津市坂本支所保管

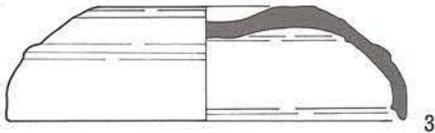
杯身(9) 立ちあがり、内傾し比較的薄い。受け部は、体部とほぼ同様な曲線がみられ、水平方向へのび、端部は丸くおさめる。立ちあがりと受け部との境には凹線がめぐっている。立ちあがりと受け部の比高差は1.1cmを測る。ヘラケズリ技法は全く認められず、体部はヨコナデ、底部はヘラ切りのまま未調整である。



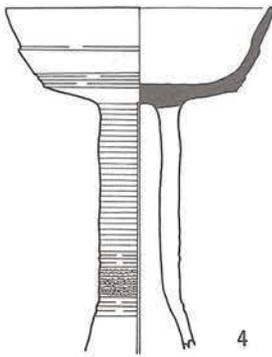
1



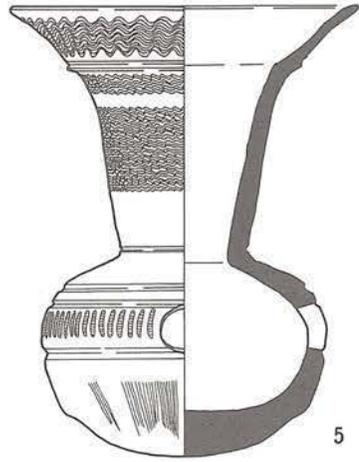
2



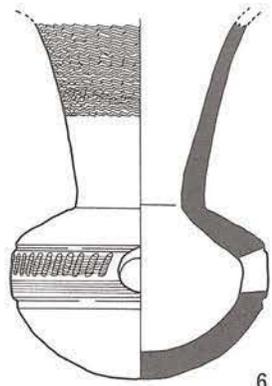
3



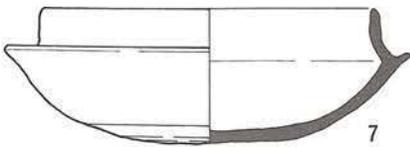
4



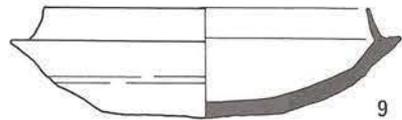
5



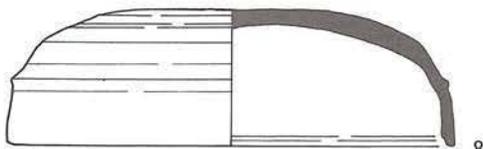
6



7



9



8



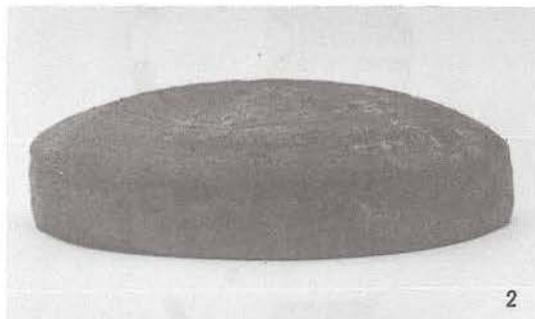
- (A) 1 ~ 6 坂本本町1653-1
- (B) 7 ~ 8 桐畑嘉市
- (C) 9 東坂本コンクリート橋付近



1



4



2



5



3



6

### III

以上のように、3地点出土の須恵器の特徴について述べてきたが、最後に若干の考察をしてみたい。

A地点出土の須恵器は、従来この付近からは全く確認されていない。したがって、遺跡の性格は明確ではないが、周辺の日吉大社境内地に日吉古墳群、日吉馬場を中心とする地域に明良古墳群が確認されている。本地点は、付近の立地条件から明良古墳群の範疇に属するものと思われ、現在までの土木工事に伴う事前調査によって3基が確認されているが、横穴式石室の石組のみで遺物の出土はなかった。これらの須恵器が仮りに古墳の副葬品と解すると、先述した明良古墳群の分布範囲は南側に拡がるとともにその築造時期は概ね6世紀後半代と考えられる。現在、坂本地区は穴太衆積み石垣を特徴とした坂本里坊の町並の景観が認められ、明良古墳群は、この近世の里坊建設によって概ね破壊されたものと推定される。

つぎにB地点出土の須恵器は、熊ヶ谷古墳群中からの発見と伝えられているが、その出土状況等については詳らかではない。が、本古墳群は現在9基が確認されている。各古墳は、比較的大型の墳丘をもち、内部構造の横穴式石室も巨石を使用している。本古墳群は、出土須恵器によると6世紀の後半代には確実に営まれていたことになる。

さらにC地点出土の須恵器は、従来まったく未発見の地点であり、付近に古墳の存在や他の須恵器関連の遺跡も知られていない。ただ、比較的高所からの発見であり、南側に近接した高所の丘陵地に裳立山古墳群が分布しており、本地点も古墳の存在が予想される。

今回ここに紹介した須恵器は、本格的な考古学的調査による出土品ではないが、今後、大津北郊地域所在の後期群集墳を調査・研究していくうえで極めて価値のある資料といえよう。

(細川修平・八田善彦・吉水真彦)